

るを可とすとの意見を唱へて頻りに奔走したりしかば名士富豪の之を贊助する者も少なからざるに至れり是に於てマキンソンは委員を設けて特に遠征隊を編制し赤道地方に派遣すること、なし汎く世上に向て義捐金を募集せしに四方より資金を投むる者太だ多く中にも英國地學協會の如きは此種の遠征の地學上の知見を廣むること大なりとて五千弗を寄附すべしと議決し埃及王は五萬弗を寄附しけり

遠征委員は此企を爲すに際して蘇丹令に向ひ

今度の遠征には何人を擧げて大將となさば可なるや敢て其の指名を望む、

と述べて暗に之を引率するの勞に任むべきや如何を測量せり蘇丹令は

トムソン若くはジョオンソンこそ適當ならめ、

と答へ尙ほ語を繼ぎて

若し此人々にして辭して當らざらんには予自ら之に任せん尤も斯る美擧なれば一切報酬又は給料を受けざるべし若し委員が他人を選定せば予は二千五百弗を義捐して聯か賛成の微志を表すべし、

と申出てたれば人々蘇丹令が義侠の心深きを嘆稱したりけり此の委員にはマツキンソンの外にウイントン、ドウトイ、ペールイ、ウオルラア、キンナード、大佐グラランド等六名なり

是れより先き蘇丹令は米國に赴きて其の探檢中に見聞したる所を演説するの約ありければ委員が決議をなさる前、泰西洋を渡りて米國に赴けり此際其の執事の計算に據

れば蘇丹令が此行に就き各地にて受くべき報酬の高は五萬弗に下らざるべしと云へり然るに着後幾くならむ十二月十一日に至り救援委員より發したる電報に接せり其の文に

足下の方略と申出とは委員にて納受せり、政府の認可も受けたり、資金も調へり、仕事は迫れり、至急に歸來せよ、回音を待つ、

とあり蘇丹令の折角の招聘に應じ遙々米國に渡航し來り今や演説を始めんとする際なりしかと此電報を披見せるより直ちに回音を發せり其文は

今電報に接せり、多謝、百事好都合なり、障礙なくば水曜日發のエアダア號にて歸航す、二十二日にハサウサンプトンに着すべし、政府に請ひザンジバルに於て必要の準備

を爲せよ、詰まり一ヶ月にて整ふべし、敬具

斯くて蘇丹令は二十五日を以て英國に歸着し草卒に準備をなしたり此時尙ほ公果國の役員なりければ白耳義に至りてレオポルド帝に謁して暇を請へり帝大に今度の舉を嘉し給ひ同國の運送船マテリアル號をば貸與へられぬ遠征隊發遣の報の世上に傳るや隨行を願ふ者雲霞の如くなりけるが其の中に就き左の人々を選抜したり

陸軍少佐バルテロット

同 大尉ステール

同 チルソン

軍醫 パルク

同 ホンチイ

此人は新ジブラルタの
此人は勇名を得たり
此人はアブクリ
此人も年少なり
此勇敢の名あり

同 トロリア

〔此人は男爵トロリアの子ロリスなり〕

此外に新ジラランドの旅行家なるウアルド及びセフソン、
ゼームソンの三名あり其の中セフソンとゼームソンの二
人の満員の後強ゐて隨從を請ひ各五千弗つゝ、の資金を寄
附して一行に加へられたるなり

發程に先たちて決定すべき肝要の問題の進路を何れに取
るべきやと云ふに在りて詮する所は東岸より入るか西岸
より進むかの二點なり東方より入らんにはザンジバルよ
りユーガンダを経て進むを順路とせるが此よりすれば惠
民侯の本營なるウアダライ地方まで幾ど千三百英里あり
西方よりせんか公果河を溯り折れてモバンギイ若くはア
ルウイミイ河を上るものにして蘇丹令は西岸より此河流
を航進せんことを欲したれど委員の意見は東岸の方を可

とせしにぞ蘇丹令は自説を擡げてザンジバルの路を取る
に決し即時に同島へ電報を發して海岸より二百里を距る
マブアアに米を送るべしと命じけり然るにイデスレイ
卿は蘇丹令に書面を送りて其の進路を尋ね且つ云く

倫敦駐在佛國公使より政府へ今度の遠征隊が若しユー
ガンダ在留の同國宣教師を危地に陥るゝが如きことあ
らば飽くまで故障を唱ふべしと本國政府より訓令せら
れたる趣を申込みたり

この旨を告げ來りぬ蓋しユーガンダ國は當時其の東部に
獨逸人の殖民地を開きつゝ、あり北境には惠民侯の兵、僞聖
に逐はれて屯集せるにぞ非常に危懼を抱ける際なれば今
若し遠征隊の多數が南方より其の國境に入らんには國王
マクウアンは如何なる狂暴手段に出でんも測られを隨

て同國に在る佛國宣教師の生命の葉尖ハミに置ける白露よりも危うかりければ斯る申込みをもあしけるなり
 蘇丹令の此の告知を得たるより俄に委員と協議を遂げ其の方向を變じて公果より進むことに更めしかば時を移さ
 せザンジバル島に赴きて夫々の準備をなし例の如く兵卒人夫を募りけるに今度は英國官吏の助力に因りて事忽ちに辨じければ汽船マジュラ號を雇ひて公果河に向ひ其の河口なるバナナ岬の前面に達したるの千八百八十七年三月十八日なり今回の遠征隊總員の士官十一名、ザンジバル島人六百十七名、蘇丹人六十二名、ソマリス人十三名、奴隸商隊長チツポ、チツアの同勢九十七名都合八百人とぞ聞し
 蘇丹令は何故にチツアの如き人物を其の列に加へたるか

を異しむもあらんが是は抑も大に故ある事なりチツアは先年蘇丹令が公果河源を尋究の際雇はれて一行を護衛し公果河を下り中途より辞し去りたる以來益々資産を増しければ其勢力も隨ひて強大となりしかど公果自由國の創建に就きては漸次其の營業——土蠻の捕拿、奴隸の賣買、象牙の押収——の區域を狹窄せらるゝが爲め深く之を喜ばせ隙もあらば妨害を加へんとの野心を抱けるの鏡に照して見る如くなれと自由國は百事創業の際にして斯る勁敵を制するほどの力なきにぞ蘇丹令は毒を用ゐて藥となすの策を運らし此人物を自由國の官吏に擧げんことをレオポルド帝に奏しけるに帝大に其の謀を是とし給ひしかば蘇丹令がザンジバルに在りし際其幹旋に因りて協議整ひチツアはスタンレイ溼地方の知事に任せられ相當の俸給を受

くる身となりければ蘇丹令の見込みし如く行末は知らせ
 今の處は警敵變じて良友となり公果河を下る奴隸賣買人
 を捕拿すべき旨を明約し尙ほ今回の遠征に就きては八百
 名の土人をスタンレイ瀑地方に集めて蘇丹令が採擇使用
 に供することを承諾したり是れぞ此行に同伴したる所
 以なりとす左れど此の一事は其後蘇丹令が世間の指目を
 招くの基とはなれり

航海中にサンジバル人が衆を恃みてハマリス人を凌ぎた
 るより爭論を開き互に兵器を執りて闘ひ雙方に死傷を生
 じたれど蘇丹令が果斷に依りて鎮壓するを得たり
 是より公果河を運漕せる河船數隻を雇ひ流れに溯りてマ
 タデイに着せり此處には障礙ありて航通を得ざりければ
 陸に上りて二百五十三英里を進み四月二十一日レオポル

ドゥイルの駐留場に達しけり此にて全隊に整列を命じて
 點檢を爲したるに人員の減少六十三名、軍銃の紛失二十五
 挺あり畢竟蘇丹令が最初公果路を擇びたるものはサンジ
 バルより陸路を取らば逃亡者の多かるべきを慮りたるに
 あれど此の道に由るも尙ほ之を免れざること此の如し
 既にしてスタンレイ池に臻る自由國に属する船舶は或は
 破損し或は閣砂して用に堪へず其の他に二隻の汽船あれ
 ども是は宣教協會に属するものにして兵卒の運送に充つ
 るを好まざり拒絶して求めに應せざりける此時遠征隊は
 糧食殆ど盡き餘す所僅に五日を支ふるに過き遲滞せば一
 行饑餓に陥るの虞あるにぞ復た細節に拘はりて正道を踏
 むに違あらざれば只得權道に出で船主に迫りて理不盡に
 之を借揚げ二隻の汽船に全隊を乗込ましめ流に逆ふて進

みけるに快速、意の如くならせ中にも一隻の漁船は漁鱸の
 構造悪しきが爲め何ほ石炭を焚くも遅々として進ま
 恰も其の意に背きて使用せらるゝを憤れるもの、如く果
 てり流に随ひて下らんとしければ纒に他の一隻の助けに
 依りて澁々と進めり同行既に斯くの如くなれば他の健康
 なる一隻も亦た速力鈍りて駛らざるに至りければ竟に機
 關の安全辨を閉ちて焚さ立てく進行し漸く五月十四日
 波ロイボイ駐留場に達するを得たり此處にホンチー、ウア
 ルドの兩人を残し百三十名の兵と共に留まらしめ翌朝一
 行は舊に依りて河を溯り六月十六日を以てヤンピヤに着
 せりスタンレイ池より航行して此に至るの水路は實に千
 六百五十英里なり

蘇丹令はチップに先發を命じ少佐バルテロットを伴はし

めスタンレイ瀑に向はしむチップは着後九日間に八百名
 の人夫を募集すべしと約して去れり、蘇丹令はヤンピヤを
 以て本據となして進行せんとしたれども更に考案を變じ
 て此處には唯だ砲臺を築き守兵を置くこと、せり兎角う
 するうちチップに伴ひ先發したるバルテロットの歸來り
 しかば之を此の地の司令長としセムソンを副とし兵八十
 を率ゐて守らしむ是は久しからせして波ロイボイ其の他
 の場處に留まれるもの來り會すべければ遂に二百七十名
 に達するの胸算ありしなり左れば蘇丹令がバルテロット
 に與へたる訓令に

八月中旬には殘兵も來會すべければ予が一行の跡を追
 ひて進發すべし、

と云ふ簡短あるものなりし此の事はチップにして約を履

まば容易なりしあらん縦しやチップに於て約に背くことありともバルテロットは殘兵を率ゐて進發すべき手筈なりし

此のヤンピヤと惠民侯が孤守せるニヤンザ湖との間に跨れる地方は未だ何人も探檢せざる暗黒の境に属せりヤンピヤは先年蘇丹令が公果河を下れる時非常に困難したる公果大林の盡頭に位し夫より南東へ向ひたる方角は蘇丹令が經驗にて略ぼ概測し得れども今回探檢の目途とせる直東の方は此の深林が何ほどの長さまで聯續せるや想像だも及ばざれば固より確知すべき様なかりき
千八百八十七年六月二十八日蘇丹令は一行と共にヤンピヤを發して不測の暗林に向ひて進入りけり出發の當夜なりき一簇の土蠻あり一行の屯處に火を發ち烟に乗じて襲

來りけるも先鋒の者之に應じて健闘し擊て却くるを得たり此を手初めとし林中の土蠻の到る處抗對し或は左右よりし或は前後を挾さみ虛に乗じて攻撃すること跡を絶たせ是れは奴隸商隊が諸方の部落を抄掠せるにぞ此一行をも其れと混同し之を防くは其の生命を護る所以なりと誤認し彼等に取りては存亡の決する所と思ひければ其の鋒太だ鋭く村外れには種々の障礙物を横へ又陷阱を設けあかり一行の何氣なく村の入口に至りて先に進める者の忽ち穴の中に陥りたる事の一再ならせ其の底には尖りたる竹木を捕ふ其の上に木葉を蔽へり此の穴に落ちて足を傷けたる隨兵少なからせ進で曲折せる處に至れば見張りの蠻兵あり一行の來るを見るや直ちに太鼓を打鳴らして之を報せると同時に數百の土蠻四方より起り立ちて毒矢を蜚

すこと雨の如きことも屢々あり左れと蘇丹令は林中の戦
争に十分の経験あれば只管注意に注意を加ふがゆる差し
て従兵を損傷せざりし

發後數日の間は鳥路熊徑とも稱すべき細微なる徑の斷續
ながらにありけれど果ては南に向て屈曲せるにぞ遂に此
徑を打棄て、東に向ひ林を穿ちて進むととなれり到處に
老樹喬木隙間もなく生茂り藤葛の之を聯結して往路を遮
攔せり左れば九十名の従兵の手にく、斧、鋸、鎌の類を執り
樹を倒し枝を伐ちなどして道を切り開きつ、歩を運ぶこ
となれば旅行と云はんよりは寧ろ道路を開鑿するといふ
方當れるか如き有様あり其の森々たる處に至れば枝上枝
累なり樹葉重疊して天を蓋ひ宛ら深坑の底に埋没せられ
たるかの思ひあり一行は暗黒の中に在りて手當り任せに

穿開しけるにぞ其の迹は隧道の如き洞形をなせり斯く密
閉の中を進むとなれば空氣は靜沈して動くとなき交替す
ることなきが爲め之を呼吸する者悪心眩暈を感せぬは稀
れなり加ふるに時々降雨ありて濡濕も亦た甚し其の他蛇
類の多きは實に驚くべきものあり胴の徑り一尺五寸もあ
らんと思はる、巨蛇の枝より枝に蜿蜒り又は地に垂る、
を見るは日に何回なるを覺ぬざるはとたり斯る難所を糧
食武器を始めとし重量の荷物を擔ひつ、進行せる事なれ
ば其の道の抄らざるは論なかるべし

七月五日に至り公果河の上流に合するアルウイイ河に
達しければ齋し來れる鋼鐵製の小舟を組立て、河水に浮
べ病者と荷物とを之に搭載して水陸並び進めるに河流は
漸次東北に向て屈曲し其の目的の方角に進むには迂回と

なれども人々衰弱して陸路荷物の運搬に堪へる他に詮術
 あければ河に沿ひて十月中旬まで一直に進みけり此河の
 塘上を行くに風景絶佳の處少なからざれども時に由りて
 は水面も坡上も夥き羽族充滿し空を蔽ひてブツ／＼と唸
 りながら人の目口に入り頬に堪へる一行大に辟易したれ
 ど其の中にはまた美しき蝶ども飛交ふて自ら眼を喜ばせ
 し事もありたり殊に珍しく覺ゆしは牡蠣の繁殖して長さ
 三十間厚さ一丈二尺位の塊をなせるものを往々散見した
 るにてありき

此邊は毎朝必き霧立ち霞こめて太陽を見せ正午に近きこ
 る雨天ならざれば纔に日光を漏らせり左れば午前のうち
 の四面蕭索として深夜の如く唯だ丁々木を伐る柯の響の
 微に鼓膜を揺かすあるのみ其の荒涼寂漠ある恰も幽界に

在るの思ひあり日光の耀くに及びて禽獸、蟲蛇漸く活動を
 始め其聲喧しきに至るを常とせり
 河の曲折せる處には多く土蠻の村あり是は上流下流を望
 見し得て敵の來襲に備ふるの便あるが故なり、土蠻の部落
 は相互に戦闘をなすのみならず遠く水草を逐ひて移住す
 る漂泊的種族ありて何時來り襲ふやも測られざれば平常
 何れも其の備をなし居れり、林中處々に樹木の疎らなる處
 を擇み榛荆を斫り莽藪を芟りて村落をなしたる跡の今は
 零落して人烟を絶ちたるを見るは蓋し戰敗れて亡滅に就
 きたるものならん

林中に棲む土蠻にも敢て敵意を顯はさざる者あるにぞ之
 に就きて食用品の交易を求むるに甚と慳吝にして與ふる
 所極めて少く得る所極めて多からんを望み絶ねて質朴の

風なし其狡猾なるに至りては更に甚しきものあり地形方角あどに就きて聞かんとするも眞實を告げず其の辭を信じて進行すれば道程を損じ途方もなき處に導かることあり、固より彼等は大抵見聞寡陋にして先祖代々林中に生れて林中に死するなれば林と河との外に又た天地あるを知らず高山とか平原とか云ふもの、其の想像にも入らされば之が形狀を説き聞かすれども談天の類として信ぜる色なし、此の林は那處かに盡くる處あるか、何れの方角かに爾々の場處あらんなど、問試むれど林の何處まで行くも際涯あしと答ふるのみ、其の他は知らず、試みに之を擒にし迫て其の知る所を供述せしめんとしたれども彼れ實に知らざるなれば如何とも爲す能はざりき、一土蠻あり一行に對ひ此より南東に方り二日程にして一大湖あり之をニウマと

名く其の中の島には異狀の蛇ありと誠しやかに告げ、れば大に喜び之を案内者として進行せしに二日目には早くも逃去りて影もなし、其の後に至りてもニウマなど云ふ湖のある事を絶えて聞かざれば全く其が欺弄する所となりたるあり

アルウイミイ河は航通する能ひぞと云ふにはあらねど處々に瀑又は急湍ありて妨げをなすにぞ例の如く綱を結びて陸より之を引上げざるを得ず又時々暗礁ありて之に觸る、の恐れあれば最も注意を要しけり

ニジャンビイ急湍に達しけるに村落の構造頗に一變し是れまでの脆弱なる小舎に引換へ太き木材を用ゐて大なる建物を築き其の堅牢なること砲臺にも代用せらる、ほどなり土蠻の氣風も太だ兇悍にして絶ゆる矢を放ちて一行

を惱しける中にもアピシマ部落などにては數百の土蠻隊を編みて屯營に襲來り箭を飛し槍、戟を揮て攻撃せる其の鋒甚だ鋭かりし辛く之を撃却けたれど此戰に大尉ステールは他の五人の兵と共に傷を負へり孰れも輕微の傷ながら苦痛劇しく或の即夜或は翌日又は三四日を経て死亡し獨りステールのみ幸に死を免かれたれども三週間計りは困臥して起つ能はざりし是に因て其の鏃には劇しき毒の塗着けあるを知りければ百方之を討尋して其の毒の性質を調べたれども軍醫すら究むる事を得ず擒にせる土蠻も死を決して白狀せざりしが偶然にも此の秘密を發見するの機を得たり一日蘇丹令は食用品を求めんとて林中に彷徨し思はず奥深く進み入りけるに一群れの土蠻ありて何か頻りに製造しつゝ、居るを撞見せしかば大喝一聲叱咤し

て之を逐斥け其の跡を檢せるに甚と大なる赤蟻と之を石にて碎き粉末とせしを包めるとを置き其が傍らには椰子油の沸々と煮へ返れるありて四邊りには鏃多く散在せり蓋し赤蟻の粉末を椰子油にて煮固め之を鏃に附着するものとは知られぬ取りて生物に試むるに立るに斃れざるはなし土蠻も此の毒矢を製造するに最も慎重を加ふるものと見ゆ村落近き處にての製造することなく必らず乾淨ツヤツヤれたる場處を擇み樹木繁き深林の奥に於てするを常とせり、蟻の外にも大なる土蜘蛛、毛虫などの恐しき毒を含めるもの少なからせして之に觸れたるのみにても劇痛を起すはとあるれば此林中に毒矢を作る材料は乏しからざるなり河の航通し得らるゝ間は荷物及び疲困の甚しき者を舟にて運搬しければ路程も捗りたれど既に航通し能はぬこと

なりての荷物、更なり舟までも負荷して進まざるを得
 せ氣力衰へ身体の疲れ果てたる人夫等は、今更に重量の加
 はりたるが如くに覺ねて負擔に得堪へせ殊に舟は水中に
 てこそ非常の功勞はあるなれ陸に上りては殊の外厄介物
 にして現に解放ちてバラ／＼となしたる舟体は十二個に
 分ち之を運搬するに二十八名を要し其の他糧に二名、底板
 に四名、桁、帆、檣等に八名合せて四十四名の手を塞ぐなれば
 遠征隊に取りては一大困難事に、属せり左れば人々追々に
 衰弱し果ての重荷を負ひて歩を進むる能はざる者出で來
 しかば已を得せ荷物を打棄て、量目を軽くし舟具の如き
 も底板、糧を始め旅行中に於て新に調製し得らる、分は皆
 な放棄して顧みせ必要あるに際せば木を斫りて之を作造
 しけり斯る有様なれば此舟の運搬は一行が最も勞苦の任

なるにぞ嘯強の壯夫を選で之を荷はしめられど歩行拂と
 らせ常に數時間を後れて宿泊處に着しけり
 初め蘇丹令がヤンビヤを出發せる時の胸算にては二週間
 許りにして暗林を横斷るを得べしと思料せるにぞ路傍の
 最も喬き樹を焚きて後に残れるバルテロットの一行の爲
 めに道の乗りとなしけるが往けども／＼森林にして山も
 なければ野原もなく日々樹木藤葛を穿ちつ、徐行せるの
 み、蘇丹令は此の林中の苦を記して云く

我々が林中の困苦は紙筆の能く形容する所にあらせ來
 る日も／＼も十丈より二十丈にも及ぶ大樹の生茂れる
 下に荆棘の一面に繁れる中を切拂ひつ、進むに、頭上に
 は獼猴、蛇類の棲ひあり脚下にの名も知れぬ虫類群りあ
 り、樹木は生ては枯れ、枯れては生じ自然に任しあれば大

木の仆れ懸るあり伏して朽腐せるあり、終日日光透徹せ
 せして雨さへ荐りに降れば其の中の空氣の窒塞せるの
 云ふばかりなし加ふるに兇暴なる土蠻、猛烈なる獸の害
 をなすあり殊に恐るべきは野象の群をなして徘徊せる
 なり一たび其の怒りに遇へば何物にても拉がる、隨ひて
 各種の病症を發しマテリヤ、赤痢其の他地方固有のもの
 數を盡くしてあらざるをし斯る困難を受くる六月二十
 八日より十二月五日に及ぶ五ヶ月百五十日に餘る、身を
 歐洲に處く者は想像にも這般の艱苦を描く能はざる所
 ならん云々

蓋し斯の如き世界無比の大林を生じたる其の原因の敢て
 知り難きにあらむ蘇丹令は之を攷究して左の意見を立て
 たり

一年の中九ヶ月までは絶へむ西風吹ききて泰西洋面より
 蒸發する濕氣を吹送り加ふるに公果河千四百英里より
 立騰る蒸發氣のため百五十日間も降雨し十分に滋潤す
 る處をば赤道直下の炎熱にて醞釀することなれば植物
 の如き日光と滋潤とにて生長するもの何ぞ迅速ならざ
 るべき其の生長蕃殖の力ハ温帯地方に比べ幾倍ならん
 も知るべからむ斯る世界無雙の大林の出來きたるも當
 然なり云々

或る時ゼフソンが分遣隊を率ゐて深く林中に分け入り迷
 ふて道を失ひ本隊に遇はざる一週間に及べる事ありき
 八月二十五日に至りテポコー河に達せり此河は幅三百ヤ
 ードもありてアルウイミイ河に注ぐ此の河邊に住する部
 落は何れも饑多の食料を蓄へ居るにぞ既に食物の缺乏を

告げたる際なれば之に就きて交易をなし一時の急を凌ぎ
 けれども是れとて永く續くべくもあらねば又もや一の憂
 苦を増せり今までも困難ならざるにあらねど眞の困難
 其の極度に達せるは是よりの事なりけり、一行皆な力弱り
 氣挫け路傍に行倒るゝもあり、猛獸の餌食となるも土蠻の
 毒矢に罹るもまゝ、よ最早や一步も進まれど樹の根、藪の
 中に横臥して動かぬもあり其の餘の者も半死半生ならぬ
 はなければ出の這ふが如くに歩みて辛くユীগアラウに着
 せり此地には亞拉比亞商隊の屯營あり此にて一行を點檢
 するに更に五十六名を減じ残れるも多くは衰弱して寸歩
 も自ら致す能はき其の中にて健康と稱する者すら己れ一
 個の体さへやうく運ぶ有様なれば中々他を扶くるの力
 なさにど是非なく病癡者の看護を商隊に托せんと其の趣

を隊長に謀りけるに隊長は一人一ヶ月五弗づゝにて養ふ
 べしと諾せり左れど奴隸を賣買するが如き残忍の奴原な
 れば果して約を履で養護すべきや甚と覺束なしとは思ひ
 けれども左りとして別に施すべき手段もなければ之を托し
 て残し置く事とし法外の價を土蠻に拂ひて些少の食料を
 買ひ求め纒に勞れを休め數日の後再び東方に向ひて發行
 す是れ時は九月十九日にして一行の同勢は二百八十五人
 なりし

是れよりは進むに隨ひ荒涼の度を加へ土蠻の部落さへ見
 當らる行くこと十六日にして八名の死し又もや寸歩も進
 む能はどと云ふ者數多出で來にければ今は進退維谷り徒
 らに時日を失はゞ總員枕を並べて餓死するより外なきに
 至れり蘇丹令は慣手の果斷に出で此處に粗末ながらも屯

營を構へ病人と荷物とを残し守兵をして之を衛らしめ自ら壯健なる者を率ゐ輕装兼程して進み食物を得べき場所を求めんと決意し八名のサンジバル人を選び先發して食料を求めしめ屯營には病で起つ能はざる大尉チルソンを始め衰憊歩を移し難き者を留め置き先發者の跡を追ひて進みけるに三四日程の處に亞拉比亞商隊の屯駐し居れりと聞きしかば專ら其の方向を指して赴けども先發者は那處へ行きけん踪跡を知らず百方搜索の末漸く之を搜り得たるが彼の八名の先發者は新屯營を去りし後、往け共く人の住する處に尋ね當らぬ其うち迷ふて道を失ひ三週間ばかりも彼此ちを彷徨ひけるにぞ後には餓て寸歩も運ぶ立樹の根下に横たはり氣息奄々として死に瀕せるを見附けたるなり、蘇丹令の一行は九日間ばかりにして屯營へ立

歸る豫考なりしが幾回太陽の出沒しても亞拉比亞商隊の居處に達せぬ兎角とする間に携帶せる食物全く盡き果てければ今は蘇丹令を始めとして孰れも草の根を掘り木の實を摘みて纔に飢渴を醫し辛うじてロンガに着せしが人々肉落ち骨立て容貌宛ら餓鬼の如く此行にも亦た中途に於て二十餘名の死亡者ありけり

ロンガには亞拉比亞商隊の屯營を設けて駐在しければ就きて交易を求めけるに亞人の刻薄なるは土蠻にも増して酷だしく一行が衰弱を極め太く食物に逼迫せるを見るより中々に憐む心は起さず之を窘め不法の利を食らんとせしぞ無殘なる其が中にも甚しきは些少の食物を示して一行が携へたる旋條銃と交易せんと強ひながら銃を収て食物を與へざるあり之を争はんとすれば立掛りて理不盡に

鞭撻を加へ打やら踢るやら恰も彼等が得意なる奴隷を驅使用するが如くに凌辱しければ蘇丹令は腕を扼し齒を切りて憤怒なし隊長に對ひ嚴談したれども政なく法なく弱肉強食なる自然天則の行はるゝ、亞非利加の中央あれば彼れは空嘯きて取合ふべき氣色なし茲に至りて只訴ふべきは腕力あるのみなれど一行疲困極まりて銃を執り戦ふが如きい思ひも寄らぬ事なれば遺憾ながらも其が虐待に任せけり斯くて法外なる價もて些少の食物を得にければ時を移さむゼフソンに命じ七十六名の兵を率ゐ引返して新屯營に赴きテルソン以下の人々を救援せしめぬ

新屯營に残りたる大尉テルソンの一隊ハ蘇丹令の一行が出發したる後ち守兵の中より強壯なる者二十名を選び食物を求むるが爲め小舟にて河を下らせけり舟の纜を解く

に當り偶然にも小魚二三尾を捕へければ之を餌となして釣を垂れ二尺ばかりの魚を獲たるが其の後ち釣を奪はれしかば復た漁りするの手段もなく此の一尾の魚の外には食物全く盡果てけり此屯營に残れるは守兵の外は悉く病者のみあれば只さへ日に弱り行くがうへ一七の食物すら得ることの出來ざるよぞ飢と病に堪へ難ねて死亡するもの日々二三名に下らむ之を葬るの氣力なきま、始の程は河中に打棄てけれども後にはそれさへ爲すを得む孰れも平臥したるま、唯だ呻吟の聲を聞くのみ死したると死せんとすると參差地上に在りて只管救の來るを待ちけれども絶えて音沙汰あらざれば息ある者は落膽するの外なかりき、ゼフソンが救援に赴きけるは蘇丹令が新屯營を發してより二十三日目なりしが此間に六十三人のうち五十五

人まで死亡し漸く虫の息の通へるは僅に八名に過ぎを其の悲慘の狀想見するに餘りありテルソンも殆ど死に瀕し居りたるが辛くして生存するを得たり

蘇丹令は暫時ロンガに足を留めて一行の疲れを息めける後も最も衰弱したる者を此地に残じテルソンとパルクの兩人をして之を指揮せしめ自ら一行を率ゐて進行を始めけり此邊は處々村落の跡を殘せども一も土蠻の棲息せるひなし是は奴隸商隊の爲め殄滅せられたるなり左れば一行の食料は常に缺乏するのみにて其の困難の狀態は是れまでに譲らざりけり既にしてウアンピチー種族の住む所に達す此種族は彼の所謂矮人にして其の軀幹平均四尺なるが是れぞ古來ナイル河源には小人あり鶴と戦ふなど云へる物語の生じたる基因ならめ此の矮人の極めて慄悍

にして一行の過ぐるを見るより處々に散在して要撃すること甚だ劇しく細徑の曲角せる處か又は彼等が身を躲すに便りよき物蔭などには必ぞ埋伏して毒矢を發するを常とせり其の猛勇なる他の部落に過ぐることも遠く彼等が死を顧みずして突進し來るさまは幾ど獍狴ある林中の猛獸に異ならむ幸にして我が銃器の精銳なるに因りて三十回に下らざる襲撃を被りたれども彼れ等の爲めに敗を取らざりし尤も其の鋒の太だ強かりしハ彼等が數月前奴隸商隊と戦ひて之を敗りし事あれば一ハ勝に乗せる勢にも因れり

十一月二十二日を以て漸くイブウリに達せり是に於て一行の困難は稍々減するを得たり此地は食物潤澤にして土蠻も亦温和なれば僅少の物品を與ふれば鶏、山羊の肉を

始め穀物、果實など數多く交易し得るにぞ差しも衰弱を極めし一行の人々も忽ち氣力を回復し此に滞在すること十九日にして出發せり途に登るに及び恰も生れ變りたるが如く一行百七十三名孰れも用ふべき強壯の者とは化しけり

十二月一日の事なりき人々路邊を逍遙しつ、小高き岡に打登り彼方此方を望観するに往路遙に青々たる平原あるを認めしかば急き其地へ赴くほどに同じき五日と云ふに打開けたる曠野に出でぬ此時の爽快なりしは宛も暗黒の洞内を脱して晴朗なる樂地に出現したるが如く一行の歡喜は得て形容すべからむ蘇丹令は其歡喜の狀を記して

吾々が日夜待ちに待たる曠野の到頭來れり太陽は眩もさまで照炫き短く柔き草は一面に生茂り日頃倍して

美しく覺ゆ、百五十日が間暗中を搜索せる身に、多年幽閉せられし囚徒が解放せられて此世に出でたる心地しつ見るものとして愉快ならぬはなければ人々意はむ歡聲を揚げ荷物を擔ぎながらに驅馳するあり頭を掉り手を搖ひて踊躍するあり芝生の上を轉帳するあり世に狂喜と云ふことあらば實に此時のさまなるべし此氣力は吾々が始めて途に登りたる際に復したるなり今は何等の勁敵に遇ふも懼るゝに足らむ人數の多き寡きなど較ぶべきことかは、ロンガにて亞人の爲めに酷き待遇を受けたるは偏に暗黒なる森林と食物の匱乏との業なりけり云々

行く幾くならむ一の村落に着せり此處にて鶏を殺し羊を屠りて一行打寄りて飽くまで之を食ひ長途の疲勞を慰め

ければ病患など云ふことは全く体中より立去りけん更に
 忘れたるが如く意に浮ぶ者もなかりけり
 是よりは到る處に土蠻の部落ありければ復た食料の乏し
 きを憂へねども時々敵對をなす部落あり左れと一行の勇
 氣平常に復しければ更に恐る、事なく打破りては驅抜け
 るに同九日に至りては全地方を擧げて一齊に起り立ち
 前途を遮らんとするもの、如く所在に角聲鼓音湧起り此
 方を投して押寄せ來んぞ摸樣なりければ蘇丹令は事のさ
 まの容易ならぬを見て但ある丘陵を相して此に據り手早
 く胸壁を築きて防戰の備をさせり此地方のユীগンダ國
 の領地にして其が太守をマザンボニイと稱せり、敵は四面
 より丘陵を圍み今や攻撃を始めんとしけるにぞ蘇丹令は
 使節を遣りて一日の休戰を約し且つ贈物を王に獻じ

吾々は害心を抱く者にあらざ唯だ道を假るのみなれば
 其の旨を國王に奏し無事を保たれよ
 と言送りしかば敵將の之を諾して早速其旨を上奏に及び
 けり然るに翌朝に至り「只管ら境外に追逐すべしとの勅命
 なり」とて「クルワ」(戰の義)と叫びて四方より攻被りける蘇丹
 令は敵の來り迫らざるに先だち勢を三手に分け三方に向
 て逆に進撃せしに銃器の銳利なるうへ何れも射術には巧
 手なり敵より放つ飛道具の此方に達せざるを幸ひと心靜
 に狙撃するにぞ一發の虚彈もなく筒音に應じて撲地く
 と打倒し瞬く間に死人の堤を築さける敵兵は之に辟易し
 て右往左往に散亂せしかば進で近傍の部落を占領せり翌
 朝に及び敵の備を立直はし昨日の耻辱を雪がんと肉薄し
 て攻立れど勝誇りたる味方の兵は勇氣日頃十倍し一十に

當らぬはなかりけるにぞ又もや之を撃破り手痛く惱したりければ其の後二三回寄來りしも唯だ遠卷きに圍めるのみ屯營近くは追來らる斯して一行の徐々と進發して前途に向へどはかしくは追跡もせせして止みにけり

十三日に至り蘇丹令は哄聲に叫べり
汝等用意せよニヤンザ湖の見ゆる遠からせ、
と衆大に怪しみ何を以て之を知れりやと問ふ蘇丹令は前面に盤踞せる一坐の山を指さして

彼處に見ゆる山の湖西のカウリー山ならせや、
衆尙は信せせ歩を疾めて山上に登り其の頂に到りて東の麓を瞰下せば果してアルバート、ニヤンザ湖は眼下に在り油に似たる水の沈靜して銀板を展べたるかと疑れ日光に映じて發する燦爛たる光りは一行為の爲めに賀を呈するも

の、如し此光景を見たる一行の人々は蘇丹令が地理に精しきを感じ且は目的の地に達したるを喜び争ひ來りて其が手に接吻したりけり、今回旅行の主眼たる惠民侯は此湖畔にありとし聞けば一行の喜び勇むも實に理りとぞ思はれける

其の夜は山を下りて一宿し翌日湖の南西なるカコンゴウ部に着せり此部の土蠻は敢て抗敵をなされども是れまで西方より來れる旅客に好き者ありしを聞かむとて贈物を與ふるも受けを如何に辨明をなせども固く執て聞入れず、就きて惠民侯の消息を尋ぬるも絶えて知らせと答ふるのみ其が動止を聞くを得ざりしが中に一人ありアンゴロ山の麓に一の白人住めりとの風聞を傳へたりと語れり、是に於て出發に先だちサンジバル嶋より派遣したる土人が

未だ惠民侯の營に達せざるを知れり若し到達したらんには侯が人を湖西に派して蘇丹令の一行を尋ねざる筈なればなり

此地より湖上を渡りて探検せんと思ひけれども如何にせん銅鐵の小舟は他の荷物と共にロンガに残置けり木製の小舟を造らんとすれども生憎く此邊には材料に適する太き樹木なし陸路より廻らんか侯の屯營と聞ゆるウアダイまでの餘ほゞ日敷を費さざれば達せむ既に火薬も盡るに垂んたれば途中若し勁敵に出遇はゞ之と對抗する事たと難しと種々尋思の末竟に士官と協議し再び暗林を潜りてイプウリイに引返し茲に砲臺を築きて駐屯所を定め兵をロンガに分遣してテルソン等を迎へ舟を始め其他の荷物を取寄するに決せり幾多の艱難勞苦を累ねて其目

的の地に達し成功眼前に在りあから之に會するを得む復び數十日を空うするに至る其が心中の遺憾の如何なりけん推知するに餘あり

千八百八十八年一月八日を以てイプウリイに着しければ直ちにステールを遣り百人の從兵を率ゐてロンガに往かしめ蘇丹令は跡に留まり衆を督して砦の築造に着手せり此の地も矢張り林中なれば廣闊にはあらねども打開ける處なれば先づ便宜の地を擇みて基礎を固め、丸太を組み板を横へ葛もて之を聯ね高さ一丈の塹を押し立て周圍には七尺の堀を鑿ち四箇の高樓を起して敵の來り迫るを望見するの用に備ふ、砦既に成りければ之をフォルト、ポードと名け近傍に十一エーカーの地を耕して穀物を播けり其の背後に在る芭蕉園は一行が重もに資りて食料となす

所なるに野象の爲めに荒され又は矮人の屢々來りて害を加ふるなど安固の地に在りても異變に遇ふこと幾ど寧日あかりき既にしてステールはテルソン等の人々を伴ひ歸りしが初め残れる病者は三十二名なりけるに生存せるは僅か十二名に過ぎむ夫より再びステールをしてユーガロウアに残せる病者を連れ來らしめんとす那の地はロンカよりも遙に西方なれば或ひは後陣なるバルテロットの一行に遇ひ俱に來らんかとも考へけれども万一を慮りて斯くは派遣せるあり又別に二十名の壯夫を選び此の大林の西なる公果の駐留場に止まれる少佐バルテロットへ書を致さしむ時に二月十四日なり

蘇丹令はステールがユーガロウアに往復する日數を三十九日と見積り其の間此地に待つべしと約しけるに四十七

日間待ちたれども歸來らざればテルソンを留めて砦を守らしめ自ら衆を率ゐて再びニヤンザ湖に赴けり此度の途中の部落に住める土蠻も力を以て激すべからざるを曉り又一行が平和にして他意なきを知りければ復た行路を妨げざるにぞ易々とカウリイに達しけり此處にて一ヶ月前一の白人來りて蘇丹令が一行を尋ね歸るに臨みて黒き薄き包を酋長に托し置けりと聞きしかば酋長に就きて之を受取り披き見たるに全く惠民侯より蘇丹令の一行に宛たる書狀にして書中には「湖南に白人の一隊が來れりと傳へ聞き尋ね來り之を遣し置きける旨を記し且つ相互通信の開くるまで湖南に留まるべし」と記しありければ蘇丹令は湖畔の營を下しゼフソンを遣り鋼舟に乗して湖北に赴かしめたり

ゼフソンの三日を経て即ち四月二十六日ムスワに着しけるに此處には埃及兵が最南の屯營を設けあり營兵ハゼフソンの一行來れるを見て大に喜び手厚く之を待遇しけり
 惠民侯もゼフソンが來れりとの報を得てければ大尉カサチーと俱に此屯營に至りて相見ける、掛禮の事了りし後ゼフソンの今回侯を救援の爲め蘇丹令に従ひて遙く尋ね來れる來歴の概要を語りければ侯ハ深く其の厚意を謝し宴を設けて長途の勞を慰めけり斯くて侯は蘇丹令に會合せんが爲め所持の漁船ケチーブ號に乗込み湖南を望で統を解きたりけり

カウリーの屯營は小高き岡阜の上に設けあり今しも蘇丹令は營内に坐して湖上遙に觀望しけるに一隻の漁船が黒烟を吐きつ、此方に進み來るを見るより急に令を傳へハ

ルクに命じ從兵を率ゐて湖岸に整列せしめ之を待受けたり日漸く没するに及びて惠民侯ハ陸に上れり此時我兵は一齊に銃を發射して之を祝しける從兵人夫等は千艱萬苦を経て遂に今日の歡會に遇へるあれば處々に點し聯ねたる炬火の光り白晝を欺くばかりの中に立ち或ハ大聲を發して謠ふあり或は雙手を揚げて踊るあり手の舞ひ足の踏む所を知らむとは蓋し此時の狀ならめ、惠民侯は陣門に於て蘇丹令と相揖して握手の禮を施し其勞苦を厭はむ遠く救援に來れるを謝しにけり是に於て我も人も永き間に譽め盡したる困難を頓に忘れし心地せられぬ
 蘇丹令は惠民侯と相語ること三週間許りにして大に望みを失ひけり其の故を如何にと云ふに侯は大尉カサチーと共に赤道地方の豊饒にして土蠻の從順なるを稱揚し防禦

の手段あらんには永く此樂土に止まりて去るを欲せむと
 語り出てたればなり斯ばかりの困苦を累ねて來り援け、
 るに其の主人たる侯にして歸るを欲せむと云ふを聞きて
 の誰か落膽せざる者あらんや、蘇丹令は其の不可なるを苦
 るに説き諭し

我等が經歷せる如き危険を冒して遙々來援するが如き
 者は多くは得べからむ純粹營業的の商隊などの到底斯
 る困難に堪へて其の急に赴くを望むべからむ而してユ
 ーガンダ王并にアンヨロ酋長は東南を遮斷して歐洲と
 の通信を絶たんとす今や寔に得難き好機あり此好機を
 逸して我等と共に歸らむば再び生還の道なからん歐洲
 の義俠家と雖も幾回も斯る遠征隊を發遣せんことは期
 すべきにあらず

と言ひけれども侯にはまた侯の事情あり此時に當り侯の
 率ゐる軍隊二大隊あり第一大隊は其の勢七百五十人あり
 之を分ちてホンチイ、ラポール等六箇所を守り第二大隊は
 六百四十人にてウアダライ、ファヂェル等四箇所に分屯せ
 り又ナイル河の西部には尙ほ保有せる堡砦三ヶ所あり千
 三百の常備兵の外に夥多の民兵もあり其他吏員、書記、職工
 等の埃及より隨ひ來れる者夥しければ輕々しく動くを得
 ず、侯は蘇丹令に謂ふやう
 予若し足下の言を容れて此地を去らんとせば同勢幾と
 八千に及ぶべし、

蘇丹令は此に答へて

予若し足下の地位にあらば一秒時も猶豫せざるべし其
 の出る所は唯だ一あるのみ、

足下の言ふ所は大に其の理あり然るに婦女老幼も亦た
 太だ多きを如何せん今此れ等の者共を連行かんとせば
 多数の人夫なかるべからむ、

人夫とや、何の爲めに、

婦女老幼を扶助せんが爲めに、足下も彼等をば遺棄せよ
 との言ふまじ彼等の到底歩行に堪へざるべし、

婦女は勿論歩行せざるべからむ歩行するの彼等が身の
 爲めならん老幼は驢に載せんのみ足下は二百頭の驢を
 有するにあらむや予が曾て此の大陸を横断せる時黒女
 の隨行せるものありしかど皆な能く歩行せり彼等を念
 とあす勿れ彼等は案外に強健なり、

侯は尙ほ氣遣ふ如き容子にて

此の如き同勢にて旅行するには多量の糧食を要するこ

と論なかるべし之を如何せん、

然り、左れと足下は多数の牛を飼養し居るにあらむや穀
 物の如きは到る處にて買得せんのみ、

然らば尙ほ熟考せん、

と是れにて談話は他事に移れり

翌日に至り惠民侯は蘇丹令に對ひて前日半途にして終り
 たる去就の談話を繼ぎ

予は昨日の談話に就きて熟考したるが上、此地を去るに
 若かむと思ふ、百餘名の埃及人は歸郷を欲する太だ切な
 り彼等のカルツーム陥りてゴルドン將軍が討死したる
 を信せむ遠からむ迎への漁船がナイル河を溯りて來る
 べしと待ちつ、あり但し兵隊の皆な此地に留るを願へ
 り其の故は彼等の生活に餘裕あり衣食豊なる土着の婦

女と結婚せる者多し、彼等は埃及に在りては斯る生計を爲す能はせ左れば孰れも歸國を喜ばざるなり今此等の軍隊を殘し去らんか彼等の忽ち平素の訓練を忘れ、檢束解けて争鬪生じ殄滅に就かざれば止まざるべし是れも亦た甚と憫然なり、

蘇丹令は之を聞き

假りに足下は歸國せざることを、せよ彼の歸郷を切望する埃及人は之を何とかするや、

其の時は足下を煩はし件ひ還らんことを希ふ、

蘇丹令は既に惠民侯に遇ひて其が安危を知れり今や侯を救援せんが爲めに來れる後陣の一隊は却て何等の音信も通せせ其の存亡すら揣られざるにぞ痛く憂慮し所詮此處にありて物を思ひんよりは今一度彼の大林を通過して其

が成行を究むるに若かきと十分辛き經驗をなしたるにも臆せせ奮然として意を決し惠民侯より百餘名の人夫を借受けて侯に辭し

能く我が言を再考せられよ、

と告げニヤンザ湖を出發せり是れ千八百八十八年五月二十五日の事なりけり

斯くてポトドリの砦に着せり是より先きユーガルロウアに赴きたるステールの既に歸來りて此處にあり同處に殘したる二十六名の病者中六名生存せるを伴ひ歸れり又少佐バルテロットの許へ遣したる二十名の壯夫は三月十六日を以てユーガルロウアを發程したる旨を復命せり蘇丹令はポトドりに留まる八日にして林中旅行の途に上りて西に向へり今回は太だ路を急ぐがゆゑ一名の士官を

も伴は老唯だザンジバル人百十一名と惠民侯より借受けたる百餘名の入夫とを率ゐて進めりポードーの司令長はステールに命しチルソン之が副たり又ゼフソンは惠民侯に伴ひてウアダライに到らしめぬ

蘇丹令の行路は嚮に來りし時には似老流に隨ひ下るとあれば意ひの外に拂りて七月十九日にはユイガルロウアに到達せり彼の凌辱を加へて虐待せる奴隸商隊は既に營を撤してヤンビヤの方へ向ひて去りたる後なりき蘇丹令は此邊の案内を善く知れることなれば晝夜を別たせ進みけるに初めには一ヶ月も費したる處も僅か數日にして通過し一行は八月十七日を以て早くもバナラと云へる處に達しける此地に於て圖ら老も自由國の東端なるヤンビヤに殘せる後陣の一族に邂逅しければ後陣の者どもは一同に

歡聲を揚げ蘇丹令の一行を迎へたり蘇丹令は辭急はしく別後の狀を問ひけるに之を率ゐる來れる士官ボンチイが進み出で、答ふる所を略記すれば

少佐ハルテロットは入夫の爲に殺され、ゼームソンのスタンレイ池に往き、トロップは病で歸國しウアルドはバソガラに在り士官の此行中にあるは獨り吾のみ、

と蘇丹令は之を聞き熟々一行の狀態を見るに如何にも非常の困苦を嘗めたりと見ぬ二百五十七名ありし人數の今生存して此に來れるは唯七十一名のみ夫れすら險回み肉瘦て宛ら太患に惱みたる後の如く現に病に罹れるも少から老實に目も當られぬ有様なれば蘇丹令はボンチイに對ひて細に其の事情を糺しけるに這は一に彼の陰險極りあきチツポ、チツブが惡意と貪慾とに基けり

蘇丹令がヤンビヤを出發したる後に至りチップは約に背きて人夫を出さざりければバルテロットは屢々使を遣はして苦請しつれども言を左右に托して徒らに日を延はすのみ左ればバルテロットは出發せんにも人夫なくして荷物を運搬するの手段なきにぞ心切りに焦燥のみ亦た詮術のなきまゝ、に空しく時日を費しけるうち氣候悪き濕地に永く滞留したることなれば人々劇しき病に侵されて身体大に衰弱しけり、チップは此体を見るより益々貪婪の心増長し其の斃るゝを待ちて數多く殘しある貨物武器の類を押領せんとは企てけり、左れば單り約に背きて人夫を送らざるのみか其が偏將をしてヤンビヤの近傍に屯集せしめ隙あらば之に乗じ暴力に依りて其の慾を逞うせんをさまさへ見ぬ其の危急なるは恰も霜の草を摧き雨の花を

打つが如しバルテロットも今は躊躇ふべきにあらざるとて親らチップの營に赴き辭を盡くして援を請ひけれども兎や角と口實を設けて言ひ脱れ果ては土蠻と戰爭中なりと伴りて肯せざりし彼のチップの偏將ハ土蠻を煽動し食物を賣らしめ之をして夜に乗じ我が小舟を毀たしむるに至る其が公然の攻撃を加へざるは曩にウアルドの英國に歸りたるは更に救援隊を連來るが爲めなりとの風説を聞き少しく憚る所あるが故なりとぞ

千八百八十八年六月四日に至りチップは漸く四百名の人夫を將ね來れり左れど僅に四十五封度に上らざる荷物を負ひしむるさへ重量擔ふに堪へざるの苦情を鳴らし役に服せざる者多し之をチップに争へども彼れは冷笑のみにて取合ひされば己を得て同十一日を以て出發すること

なれり是れより先き蘇丹令に隨行したる人夫のヤンビヤに逃れ歸れる者ありて蘇丹令は途上に死せりと誠しやかに傳へければ隨行の士官より一通の信書すら贈り來らざるにバルロットの鈍くも之を輕信して蘇丹令が遣し置ける命令は既に消滅せるものとなしたり他の士官も敢て異議を唱へざりければ更に英國委員より別に訓令を受くべしとてウアルドを海岸まで下らしめけるに英國委員より蘇丹令の命令は尙ほ効力を有すれば依違せし服従すべき旨の回音を得たるに茲に漸く發途するの運びとこそはなりたるなれ畢竟後陣の一隊が斯く迄に困苦を極め坐ながらにして死亡病瘵相踵ぎ其の人數の四分一に減せるものはチップが惡意の違約に因るとは云へ亦たバルロットが遲疑決せず空しく時日を費消して九ヶ月餘も身

体に慣れざる不健康の地に滞在せしに歸せざればあらざり去る程にバルロットの出發の日より未だ七日を経ざるに早くもチップの手より繰出せるマンエマ種の人夫の爲めに銃もて殺害せられける左ればボンチイ代て之を率ゐ専ら一行を司令しつゝ、行進せるに苦情百出動もすれば背叛せんとする有様の見ゆるにぞ意を挫げ辭を卑うして之を慰撫し辛くバナラまで來りけるなり

蘇丹令の後陣が困厄の事情を詳にし深くバルロットが不幸を悼みチップが背約を怒りけれども亦た今更に詮方なければ即時に之を安頓せしめて夫々に手當なしけるほどに人々精神振作して早くも困難の中を去りたる心地せり、蘇丹令が衣服調度の悉くヤンビヤに残し置きけるがバルロットは蘇丹令の死亡を信じて疑ひざれば出發の際

餘計なる荷物なりとて公果河より歐洲に送還せしにぞ今は一領の副衣さきすら持たぬ附身故衣まの身とはなれり蘇丹令は此際の感情を記して

囊に李備克斯頓を救出だせる時は救はる、方が破帽弊衣甚と見苦るしかりしが今は救援に赴く者反りて見棄らしき服装なり、

と夫より只管ら道を食りて進みけるに食物は缺乏する、矮人は來り襲ふ、病者は増加する等、幾ど第一回林中行進の慘劇を繰返しけれども難に臨みて屈せざる蘇丹令は千百の障礙を屑せつせどもせむ豪健快活の手腕を揮ひて片端より之を排除し竟に十二月五日を以てポロドポロドに歸着したり

ステールは無難にポロドポロドの砦を守りつゝ、ありしが蘇丹令の去りたる後ち數月を閑したれど惠民侯よりもセフソ

ンよりも一回の音信たになし這は決して好兆にあらむ何事か異變の生じたるにやあらんと甚と氣遣はしげに告げ、れば蘇丹令も眉を蹙め何は兎もあれニヤンザ湖ニヤンザ湖に至りて模様を搜らんとをさく其の心構へをなし居る折柄カウリイカウリイより土人來りてセフソセフソより蘇丹令に贈れる書を齎らせり其の書は千八百八十八年十一月七日附にしてポロドポロドに到達したるは翌年一月十六日なり其の大意に云

予は惠民侯に隨ひラバルラバルに赴きしに侯に隨行して貴君をカウリイカウリイに見たる部下の埃及士官エフエエフエンデイと云へる者が一人の書記と共に奇怪なる流言を放てり、彼等は貴君を熟視したるに決して救援に來りたる者にあらむ唯だ一個の冒險者たるのみ、其の埃及より來れりと云

ふの虚誕にて齎らせる埃及王及びウバルパシヤの書
状は偽造なり、其のカルツームが陥れりと言ふが如きは
固より信ぜるに足らぬ、惠民侯は貴君と謀り人民を欺き
て其の婦女を連去り之を奴隸に賣らんとする奸策を廻
らしつゝ、ありと言ひ觸らせり無智の人民之を聞きてな
じかは驚き怒らざるべき忽ち蜂起して叛旗を翻し侯と
予とは幽閉の身となれり、云々

後に聞けば此事の起りたるは八月十三日にて惠民侯が
軍隊、吏員をラバルに呼集め國王より歸國を命ぜるの勅書
を讀上げたるの時にあり侯の捧讀を了るや衆皆な喜はせ
して之を疑ふの色あり頓て一個の蘇丹人、衆を排して進み
出で

這の皆な虚誕なり、其の書翰の偽造なり、埃及に通むる道



路ハナイル河に沿ひカルツムを經る外には之あるなし、我等は此道より歸るにあらざれば生死ともに此處に留らんのみ、

と叫けべり、侯は大に憤り二足、三足歩を進めて
汝等疾く此の叛徒を捕へせや、

と大喝しけるに既に流言に惑はされて激昂せる兵卒は一時に簇起ち手にく、劍を擬しつ、侯とセフソンとを取圍めり侯は劍を掣して叱斥せしかども事茲に至りては亦た施すべき方なくアハヤ凶暴なる叛兵が一撃の下に半世の夢は破れ了らんとす今此の一殺刹二者の命の危きこと春の朝たの泡雪に熱湯を灌ぐに異ならせ斯くと見るより數名の士官は慌忙しく其處に立塞りて哮り狂へる兵卒を取鎮め繞に匪行を遂げしめざりき實に危かりける事どもな

侯とゼフソンは士官の救護に依りて幸く殘害を免れぬれどもジュンフルに到着したる時、埃及の士官ミューリアガと云へる者徒黨を結び公然侯とゼフソンを逮捕して獄に投じけり叛徒は纏て軍法會議を開き先づゼフソンを喚出して其の來歴を糾問し國王の書翰の出所を尋ねけるにゼフソンは惠民侯救援の顛末を有りの儘に陳述せるに書記は件の書翰と他の勅書とを照合して良久しく其が眞偽を判別し居けるが忽ちハタと地上に抛ち

這は疑ふべくもなき偽物なり、と呼ば、れり斯くて此の會議も混雜の中に閉ぢて決落に至らざ、其の後、叛徒は侯とゼフソンをば鎖にて縛しレガツフへ送致せんと評議しけれども道がに久しき間司令官と

して戴きたる侯なれば斯る虐遇をなさんも深刻なりあと云ふ者ありて是亦迷に何れとも決定せざりき此の時偶々飛報ありて僞聖の師は北境に侵入し既にラドの堡砦を陥れ勢に乗じて長驅せんを摸様ありと傳へければ衆大に驚き周章措く處を知らざりけり浩る折しも激將オマルサリイより惠民侯に宛てたる書狀を齎らせる使者來りければ叛徒は之を捕へて其の書を奪ひ披見しけるに云く

カルツームは陥りてエルドンは死し其の他サチール、ニエラを始め耶蘇教徒は悉く打殺し埃及の堡砦を略取せるは數ふるに遑あらず此外埃及諸將の來降せる者も亦少なからず卿は何を待んで孤軍援なく此の地を守るや須く速に降參すべし

どの意を述べあり又別に埃及の將軍ラプトンベイより侯に宛てたる書状をも添へあり是ハ發信の日附太だ舊るきより察すれば途中に於て偽聖の手に押収したるを今度送達せるものと覺し其の文ハ極めて簡短にして

今や事既に去れり所在偽聖に應じて背叛せり予ハ重圍の中に在り明日の運命も測られを此の書を携帶せる者詳に事情を語るべし、

と記せり蓋し此等の事を知りたるは叛徒の中に侯に心を寄せ居る者ありて密に侯へ通じたるに因りけるとぞ叛徒は以上二通の書状を得にければ和戰の軍議を定めんが爲め一場の大會議を開けり會議の結局遂に防戰すべきに決せしかバ檄を移して大兵を集め將に軍を出さんとするに臨み偽聖の使者に立ちける三名の回教僧侶を引出し

迫りて敵軍の情勢を説かしめんとす左れども彼等は觀念の眼を閉ぢて一言をも發せざるにぞ叛徒等大に怒りて峻嚴なる拷責を加へける其の法ハ數日の間乾きたる食物のみを與へて一滴の水をも飲ましめを其の煩渴甚しさに及び目前に冷水を示して問に答へしむるなり是にても使僧は尙は其の緘黙したる口を開かざりければ更に割竹を其頭に環繞し徐々に之を緊束せるに肉綻びて荔枝の如く鮮血溢れて面を浸し果てハ骨さへ露る、に至る此の外埃及に於て行はる、有らゆる責道具を用ゐて拷掠しけれども彼等は宗教的頑固を以て偽聖を信仰する者なれば呻吟の聲すらなさを堅く苦痛を耐へ忍びけり叛徒は竟に力を以て招承せしむる能はざるを見て之を挺殺しナイルの河中へ投じけり是れ埃及に回教の僧徒は鉛若くは鐵にて死せ

其の迷信あるが故なり
 既にして偽聖の軍は進んでレガツフを陥れ勢益々猛烈あ
 るにぞ北部の堡砦は風を望で潰走し今は危殆に迫りしか
 ば叛徒等大擧して邀戦したるに固より之を統督するの將
 帥なき不紀律の軍隊なれば散々に打敗られ多くの士卒を
 亡ひけり全軍は此敗北に心隠し何れも畏れを抱きけるう
 へ叛徒の中に在りて最も侯を忌める士官の多く此戦に陣
 歿しければ跡に残れる士官兵卒の大將なくして戦に勝つ
 能はざるを曉り稍々悔悟の色ある處へ南部に屯在せる軍
 兵の侯の幽囚を解くにあらざれば防戦せしと唱へける、叛
 徒も今は之を拒諱ふの擬勢なく遂に侯をウアダライに送
 致して其が監禁を解きければセフソンも共に釋さるゝを
 得たれど尙は嚴しく兩者の舉動を監視せり

オマルサリイは既にレガツフを抜き勝に乗じて兵を進め
 シユファイルを圍み環攻すること數日に亘りしかど守兵
 の死を決して奮戦しければ且く圍を解きてレガツフに退
 き援軍のカルツイムより來るを待てり
 セフソンより蘇丹令に宛て發したる書狀は釋放せられし
 時に筆したるものにて日附は十一月七日とあれども使を
 發したるの十二月十八日の事なれば蘇丹令にの一月は
 かりの後に接手したるあり之と同時に惠民侯よりも一封
 の書翰を贈り越せしが書中には唯だセフソンが記せる所
 と大同小異の事實を寫せるのみ侯が前途出る所の方針に
 就きては一語の説及ぶなければ蘇丹令は惠民侯が事此に
 至りても尙は離叛せる部下に其の身を托するの意なるや
 其の決心を確むるに由なかりし

蘇丹令は表向きの書状を裁してセフソンに回答せり是れには故らに何人が披讀するとも妨なき事のみを記し別に一封を作りて秘密の方案を告げたり其の要領は

足下の地位は實に遠察するに餘りあり能ふべくは逃歸るに若か老惠民侯も俱に脱れ來るを得ば大に好し足下豫じめ其の期を告げなば予は分隊を發して之を湖北に迎ふべし予は別後千三百英里を往來したれば疲困極れり幸に侯をして予が状態を諒察せしめよ

叛徒が予等を掩撃せんとする謀ありとの事に就きては復た慮を勞する勿れ予等は近傍なる土蠻との關係太だ親密なれば敵が十二英里内に近くは坐して知ることを得べし埃及の叛徒攻寄するとも何ほどの事かわらん若し互に舌戰(相欺く)せんか予等の多年最猾の種族と聞ゆ

る亞拉比亞人を相手とし其術に慣居ればよも敗を取るの虞なからん足下は今蘇丹の領内に在り意を留めて土地の誘惑する所とならざらんことを要す蘇丹地方の懼るべき渦ありと見ぬ一たび來れる歐人の其巻込む所となりて出づるを得せ……予は何とかして惠民侯を救はんと欲す若し救はるゝに意あらば又能く之を救ひ得るなり出發に臨みて委員は言へり此彈藥を以て侯を救へと埃及王亦た宣へり卿往きて侯を助け出せよ然れども彼れ若し去るを欲せせして依然留らば彼れ自ら其の責に任せる者なりと今や予は山河を跋渉すること四千英里勞苦を累ねて此彈藥を持來れり其の去就は侯の擇むに在り歸來せんとせば速に歸來すべし此際は遲疑すべき時にあらせエースカノ一か孰れか決答せよ予等は日な

ら老歸國の途に上らんとす、云々

斯くて蘇丹令は再び衆を率ゐてカウアリーに到れり、ゼフ
ンも蘇丹令の書を得て自ら此地に歸着す是れ二月六日
の事なりけりゼフソンの言に據れば惠民侯に追隨するこ
と九ヶ月、其間に唯だ知り得たる所は

侯が大敵は感情なり、

との一事あるのみ蓋し其の事情を分拆すれば

惠民侯——人民が去らば去らん、彼等が留らば留らん、

士官カサチ——太守去らば去らん、太守留らば留らん、

忠實ある部下——侯もし去らば我々も去るべし、侯もし留
らば我々も留まるべし

と云ふに外なら老斯ては何人も主動する者なければ何時
決断すべや實に際限のなき事なれば蘇丹令は更に一封の

書を裁して惠民侯に寄せ其が確答を求め一面はステール
に使を送り殘兵を率ゐてカウアリーに來り會すべしと傳
へけり

二月十三日に至り惠民侯は瀛船に搭じて突然湖南に來り
カウアリーに近き灣に入りて錨を投じ直に書を蘇丹令に
寄せて云く

予ハ瀛船二隻にて足下に隨ひ歸國せんことを望める部
下の軍人を連來れり、都合士官十二名、兵卒四十人あり此
外に尙ほムスワに集り居るもの若干あり、是ハ更に瀛船
を遣りて迎へ來らんとす、今や一時發作せる狂濤も鎮靜
せり、殊に此等の徒は粗暴の舉動をなす者にあら老幸ひ
に放懷して善く視られんことを望む、書餘は不日面晤に
讓る、云々

侯が斯く俄に歸計を決したる其の原因は地方政府の再び變動したるにあるもの、如しゼフソン營て侯に向ひて部下が背叛せむば兎もあれ、今斯る無禮を加へたる上は之に對する關係は最早や解けたるにあらむや、と述べけるに侯は

然り、彼れ等もし予に對して忠實ならば、之を見限るに忍びざれども今は其の羈絆を脱却せり、予は唯だ予が安全を謀るも妨げむ、

斯くは言へるもの、侯は尙ほ繕々の情に堪へむやありけん

予もし獨り去らば彼等は指して云はん、惠民侯は遂に部下を捨去れりと、是亦た忍びざる所なり、

と云へりゼフソンの押返して

蘇丹令もし隙に乗じ足下を擁し去らば如何ん、

其時は予敢て拒まざるべし、

と答へぬ、蓋し侯がいよく去ることに決意せるまでは幾多の沈思熟考を要せしものと知らる、なり

惠民侯は二月十七日を以て蘇丹令の屯營に來り前途に就き百事打合せをなし協議の末蘇丹令は埃及人に向ひ

發途の期ハ四月十日とし何等の事情あるも此期を延ばさじ、

と約束したり此時營中に毒瘡を發し此れに憾染せるもの百名に及びけるが軍醫バルクが晝夜の別なく治療に手を盡したる甲斐ありて漸く之を撲滅するを得たり左れども此が爲め藥桶を傾けて唯だ僅か許りの炭酸曹達を餘せるのみとなりけるも其の効驗空しからむ四月一日に至り

ては二百八十名悉く健康に復せり
 此頃には惠民侯が部下の人々も追々に到着しけり、孰れも
 家財残ら老荷造りして持來れりと見ぬ寢床、大箱、竹籠を始
 とし銅鍋、花瓶、礪石の類ひまでも携へたるあり、甚しきハ食
 堂に備ふる姿見鏡、米國の老婦人が旅行に携ふるが如き大
 革箱を持來り之に鳩、鸚鵡の籠さへ添へたるあり左れば其
 の數の夥しきこと二千八百餘箇に及べり其のさま敵に迫
 られて走る落人おとしには似るべくもなく夥多の資産を蓄へて
 本國に歸る出稼人に異ならせ、蘇丹令は從兵に命じて湖岸
 に山の如く積上げたる件の荷物を營内へ運搬せしめける
 に其の包數八百五十箇に及へる比るより從兵孰れも不滿
 の色を顯はし斯る無益の重荷は負擔するに堪へせと苦情

を鳴らせり是は太だ有理うらまなる事なれども強めて耐忍せし
 め千三百箇までは運うせけるが最早や疲倦極り此餘は力
 及ばずとて斷然謝絶して復た動かうさかし
 出發の期も既に近きけるに來るべしと約したる部民の尙
 は到着せざる者甚と多かりければ蘇丹令は士官一同を侯
 の面前に集めて左の如く演説しけり

埃及人の放縱なる荷物運搬の際ザンジバル人を凌辱せ
 ること甚しかりしかど此等は我々に於て耐忍せり、今や
 歸國すべしと約せる惠民侯の部民に遅々せる者太だ多
 し、此れ等の徒より辭巧なる信書の達する毎に侯は大に
 満足すれども、交誼なき我々には彼等の心術に疑なき能
 はせ、彼等は其の實、歸心なく我々より彈藥を得んが爲め
 俱に歸國せんあと云へるにはあらせや、聞くが如くなれ

ば彼等の未だウアマライをすら發途せざと、此徒を待たば何時まで待たねばならぬか知るべからず、彼等が反覆常なき、多年恩情の淺からぬ惠民侯にさへ叛きて之を危地に陥る、ほどの者なれば、來り投るるも餘り信任すべき徒にあらざり、此の如くなれば我々は豫期に従ひ四月十日に出發すべき手、抑も亦た彼れ等を待つべき手、と述ぶるや人々の異口同音に之を待つに及ばず、期日に及ば、出發すべし、と答へたり是に於て蘇丹令は徐かに侯を願み足下は以て如何となす、と問ひけるに侯は此れに答へて更に士官に向ひ反問を起し

諸君は此場合に臨み、良心より予が部民を見捨て去るを

是認するや、

衆聲を齊うし

固より、

と答へければ茲に評議纏りて愈々打捨て去るに決せり埃及人の狡猾なるサンジバル人を欺きて其が携帯せる武器を押奪せんと謀れるよし聞えしかば蘇丹令は例の機敏にして果斷なる手段を施し之を防遏せんが爲め猛可に一同整列すべしとの命を下しけり救援隊の隨兵は號令に應じて直ちに列をなしたれども埃及人は嚴格なる紀律に嫻はざるにや時に及びて整列をなさざる者あり、蘇丹令は聲を勵ましサンジバル人に命じて棍棒を執り怠惰にして命に従はざる者を逐出さしめ小舎の中に安臥し居る者などは其が頸筋を掴みて引出し夫れにても尙は動かざる頑徒

の衆の面前に於て鞭撻を加へ抗拒せるの鎖もて之を縛し
頓て惠民侯を顧みて云く

足下請ふ此等の埃及人に告げよ、既に此處に來りて予が
司令の下に立つ上は、復たウアマライ、ジュフアイルに於
けるか如き不檢束、不取締を止めざるべからむ、若し然ら
むして命に抗し令に違ひ悖戾の所爲あるに於ては、予は
己むなく之を殺戮せざるを得ざるに至らん、

侯之を諾して部民に傳へければ流石の埃及人も之を聞き
悚然として容を改めぬ、是に於て精しく一行の人員を點檢
せるに侯の部下は男百三十四人、女八十四人、下婢百八十七
人、二歳以上の兒童七十四人、幼兒三十五人、合計五百十四人
此れに役夫に雇ひたるマザンボニの土蠻三百五十四人
を加へて蘇丹令が救援隊に合すれば總勢千五百人に及べ

り
四月十日いよくカウアライを發して歸途に上りけるに
二日を経て蘇丹令は病に臥し起つ能はむ一時は甚と危殆
に迫り蘇丹令も今度こそは回復覺束なかるべけれど覺悟
するに至りしかば此の機に乗じて徒黨を結び離叛せんと
企てたる者あり幸にして事未然に發露し早くも其の巨魁
捕に就きける是ハカウアライにて埃及人の奴隸たりしを
解放し連れ來れる者なりけり茲に於て軍法會議を開き之
を糾彈したる未有罪なりと判決しけり此時蘇丹令は病の
爲め衰弱すること甚しく床上に在て身を轉ざるにさへ他
人の扶けを待つはどなれども其の精神の堅きことハ鐵の
如くなりければ病を勉めて強き興奮劑を服し椅子に腰を
打懸けたるまゝ、昇れて幕の外に出て衆の環列せる中に坐

を占めて眼を瞑らし手を搖ひ

我々が百難を排して茲に來れるは汝等を救はんが爲めなり、而して今其の報酬は此の如し、汝須らく上帝の前に往くべし、

とぞ宣告しける行列の隨兵はやをら立懸りて罪犯を引立てつ、傍なる大樹の下に至り杖に懸けたる繩を把りて綁るよと見る間もなくアツと發せる一聲を此世の名残りとして疾くも其が体は空中に吊下れり

蘇丹令が病劇きが故にマザンボニに滯留すること一ヶ月に及べり此間湖北に留れる埃及人にして追着かんとしたらんには十分の時間ありけれども跡を追ひて來れるは唯だムスワ屯營の長一人のみなり營長が出發せる際には十二人の同伴者ありけるも皆な途中より引返し去れり此

ムスワには六十名の營兵あり惠民侯が最も信任するに足る者となせし所なるに其の狀は此の如し他は推して知るべきのみ

五月八日に至りウアダライに在る軍隊より書東到達しけり書中に

本隊は悉く隨歸を望むを以て暫時出發を猶豫せられんことを請ふ、

とありしも蘇丹令は

我々の徐々行進するが故に輕裝の兵隊ならば追着くこと容易ならん、我々の最早や滯留する能はき、

と答へけり是れぞ赤道地方に留れる埃及人が最後の音信にして其の後は果して如何に成行きけん茫茫跡絶ぬ今日に至るまで其の運命を知るに由なし

歸路はユーガンダ國の南境を迂回するに決し即ちアンヤ
ンバカ、カラグウイ、ユーウインザ、アンヤンエンビ、ユー
エー、マプウアプ、バカモヨウを経てザンジバルに達する豫
定なり左ればセムリキ河に沿ひて進行しけるに此地に住
む土蠻は何れも温和にして行路を遮斷するものあらざり
しもアンヨロの酋長が野心を抱き河を越え來りて此地方
を占領し居れば是非とも之を突抜きて通過せざるを得
若し其れを避けんとするには例の大林を穿ちつゝ、進むよ
り外に道なし是れは到底婦女を伴へる埃及人の能くする
所にあらねば蘇丹令の策を決して進み戦ひ初度の手合せ
に痛く驅け破りて懲らしけるにぞ二度と敵對ふ氣勢なく
一行が通過するに任せけり
斯くて一行は南方に屹立せる山岳を目當とし徐々此針路

を執りて進みけり蘇丹令がカウアライに在りける日、遙に
此山脈の頂を望見して當時此れをエルドンベンチツド山
にあらずやと疑へり蓋しエルドンベンチツド山の蘇丹令
が千八百七十六年の探検中に見たるものにして其の頂の
尖りたりと記憶せしが今見ゆるは山巔區平にて積雪皚々
たり、一行は進で河の東岸に渡りけるに此邊一帶の地は曠
濶なる原野にして地味沃饒あり河幅は四五十間もあらん
と思はれ其の流の急なる處は一時間三四ノットの間にあ
るが如し進むに従ひ處々に森林散在すれども固より公果
大林の如き深鬱あるものには遇はざ、數日にして雪山の麓
に達せり、今新に發見せられたる山は後にリウエンゾリー
の名を以て世に知られたる中央亞非利加の一大山なり、蘇
丹令は精しく此山を測知せんと欲したれども常に霧深く

立罫め霧霽る、も白雲半を掩ひて其の全形を見る事稀れなれば數日の滞在在中も僅に三四回山上を望めるのみにて精しく知るを得ざれども山の巔までの高さ一萬八千尺若くは一萬九千尺ならんと概測したり是れ昔時亞拉比亞の旅人が月山と稱へたるものとは知られぬ此山より流る、水はアルバート、エドゥアード湖に注ぎ夫より流れてセムリイ河となりアルバート、ニヤンザ湖に入り再び流れてウイクリヤと合し遂にナイル河の上流に注ぐなれば是れぞ著名なる河の重なる供給をなす水源にてありき、一行の士官の皆な山巔に登りて積雪を踏み實地を探檢せんと欲したれども身体衰弱し居るが爲め望を果さざりしが獨りステールは一小隊を率ゐて一萬七千尺の處まで登りたれども其處より頂きまでは削取りたるが如き壑ありて登るこ

とを得せして引返へせり

夫よりエトソンガラ地方に入る此の地にカチトフと云へる村ありウアラヌラ部落の本營を置く所にて此處を距る遠からぞ一の盤湖あり其の長さ二英里半に餘り盤水極て濃く處々結晶したるものさへあるにぞ湖邊に住む土蠻に取リては甚と切要のものあるに今やウアラヌラ部落より大舉し來りて件の盤湖を押傾せんとするに遇へりウアラヌラ部に屬する蠻人等は時々一行を途中に要して敵對せし事あるにぞイデや返報なし吳んと蘇丹令の湖畔の土蠻を助けて之を邀へ熟練の從兵に精銳なる兵器を執らせ隊伍を整へて進撃せしめ連戰連勝の功を奏し散々に之れを撃破りて竟に遠く走らせければ土蠻の喜び云へば更なり

アンヤンバカ酋長なども大に之を徳とし夥多の食料品を

供給して謝意を表し是よりハ到る處の部落皆な其の戰勝を賀し争ひて食を供し物を獻じけり、部落の平和なる地を過ぐる一行の行列は眞先きに二十名の先鋒進み其の次きハ蘇丹令自ら健驢に乗り二名の兵を従へシヅクと行き次きに埃及の國旗たる三星の徽章を掲げ次きはザンジバル人三中隊にて第一隊はゼフソン第二隊はステール、第三隊はチルソン之を指揮す此等の諸隊は何れも二列となりて進みけり次きハボンチイの指揮せるニウビヤの中隊にして其の後に續けるは惠民侯の女フェリダアが吊床に乗りて昇れ行くなりそれに添ひて惠民侯は其が士官と共に悠然と打せ其の後にハ埃及の人民等が列をもなさずアロクと歩み最後にはバルクがザンジバル人第四隊を率ゐて之を押ゆ左れば時ありては其の行列の三英里の長さ

に及ぶことあり

アルバート、ニヤンザ湖よりカラグウイに至るまでは沿道の土蠻より穀物、芭蕉實、牛肉などを供給しければ一行は食料品の窮乏を感せざりしかと進むに従ひて氣候に激しき變異を來し炎熱燬が如くなるかと思へば忽ち北風涼を送りて肌膚に粟を生むるなど健康に害あること少なからねば俄に熱病患者の數を増し果ては百五十名枕を並べて臥すに及び惠民侯の如きも亦た屢々病に罹りて困臥しけり黑人には熱病に感じたる時直ちに草藪に潜入すれば治すと云へる迷信あるより竊に藪中に臥し爲めに重症に陥る者多かりき、懦弱なる埃及人は病の爲め又は長途の疲れに得堪へずして一行と同伴するの勇氣なく樹蔭に躲れ藪中に潜みて列を脱し後陣に發見せられざる者は其の儘跡に

殘れり言語は通せぬ地理は知らぬ孤獨蠻地に留りて土傳の爲めに如何なる凌虐を受くるにや最と氣遣しき事どもなり斯く一人り減り二人り散りて七月に至りては行方知れざる者百四十一名の多きに及べり

ウイクトリヤ、ニヤンザ湖の南端なるユーウインザに達するに及びては土地も平坦となり氣候も温和に復しければ大に困苦の度を減せり既にして一行は宣教師マツケ一の説教場に着しけるに教徒の待遇甚と厚く諸ろの利便を得にければ茲に滯留すること三週間にして人々の疲困を醫しけり此の地を出發してウアスクマに至りけるに土蠻は歩々抗敵して幾ど寸地を争ひける是れハ蘇丹人が顔色深黒にして容貌の古怪なるを見て大に驚き異しみけるより斯くは妨碍を加へたるものあらん左れど行くこと五日に

して土蠻の襲來は止みにけりイキンジニに於て佛國の宣教師に遇へるが海岸まで一行に同伴したしと請へり此より獨人、伊人、埃及人等の同勢少くして土蠻の妨害を懼る者所在に保護を請ひ同道を望みけるにぞ海岸に至るまで又は總勢夥しき大數となれり

バンソウイニに達せる折柄獨逸皇帝より惠民侯の救援隊を迎ふるが爲めに特派せられたる少佐ウイスマンより歐洲風な調理したる佳味の食物并に醇酒等を餽り來るに遇ひぬ久しく野味粗食の外口に入らざる人々なれば舌を鼓らして之を賞讃したりけり、キンガミに到達せるの日、少佐自ら村外に出で一行を迎へ皇帝の教旨を傳へて長途の艱苦を慰めけり

千八百八十九年十二月四日(明治二十二年)と云ふに一行勢

ひよくバカモヨウ港に到着し喝采の聲喧しき中に迎へられて進入りけるに街頭には家毎に旗章を翻して其が歸着を祝しけり此夕べ少佐ウイスマン主人とありて夜會を開き一行を饗應したりける、蘇丹令が勞苦も茲に全く終局を告げぬ蘇丹令は當時の感情を寫して云く

今や予が職掌は結了せり、惠民侯は友人の中に歸れり、其の士官カサチーは同國領事の傍に坐し、我が英國士官は國人と談笑しつゝ、あり、忠實なるザンジバル人は其の本國に着せり、是れより後は何様の事ありとも、予が關する所にあらず、今にして予の始めて重荷を卸し何人にも責任なし、蘇丹令の羈絆を脱して再び自由の身とはなれり、云々

此行は其の主眼たる惠民侯を敵軍合圍の邊境より救出し

たるの外學問上に得る所淺からむ千古未發の地を探検して世に表白したるもの實に千二百英里、中央亞非利加の地形山川は概ね此に因りて明瞭となりたるなり、今や英、佛、獨の三強國が此等の地方に向ひて殖民地を拓き競々として日に繁榮に赴きつゝ、あるものは是れ果して誰の功ぞ偏に蘇丹令が超凡絶群の資を以て數年間瘴烟瘴霧の中を踏破したる無量の功德に因らむんばあらず

遠征隊が學問上其他に於ける所得は固より多からざるにあらずとも損する所も亦た少しとせむ出發の際六百二十名雇ひたるザンジバル人中生きて還れるは僅に二百二十五名、六十八人の蘇丹人中唯だ十九名、十三人のソマリ人中僅に一名のみ、歐洲人に在りてもバルテロットは殺されゼームソンの病歿せり、千八百八十七年三月より同じき八

十九年十二月に至る二年十ヶ月の間に四百五十の人命は
 蠶烟深き處に亡べるなり其困苦艱難は實に想察に餘りあ
 り

蘇丹令が公けに救援委員に差出せる報告書中に

今後此の暗黒世界に入るもの才高く識深きは之をさきに
 あらざるべし、然れども人性若し予が知る如くならんは
 は、其の堅忍不撓なる、其の職掌を盡くすに誠實なる、未だ
 予と艱苦を共にし予が事業を助成せる ステール、チルソ
 ン、セフソン、バルク、ボンチイ の如き者は断してなかるべ
 し、

と記し力を極めて其の士官の行爲を稱賛せり

蘇丹令と惠民侯との關係に就きては世上に浮説紛々たる
 が二者の間相和せむ相協はざりしことあるは固より打消

すを得ざれども世に喧傳するが如き間柄なりとの信せら
 れるを縦ひ多少待遇の上に於て深刻に渉るの嫌ありたりと
 するも是ハ畢竟二者稟性の同じからざるに坐するのみ蘇
 丹令は剛毅にして直情徑行の人なり温和にして寛優ある
 惠民侯の感情を傷ふも亦た己を得ざる所ならん復た何ぞ
 之を以て蘇丹令を咎む可けんや

蘇丹令ハ ザンシバル に着せるより戸を閉ちて紀行の筆削
 に従事せるに四方より其の歸着を聞きて書を寄するもの
 相踵ぎ船便のある毎に郵書机上に堆積せり并は其の答の
 ことなりかし蘇丹令の内地に入るや其の舉措は世界の注
 目する所となり或は病めり或は死せりなど一舉一動の海
 岸に傳はる毎に揣摩の臆説さへ加へて各地の新聞紙に登
 載しければ蘇丹令を知れるは更らなり嘗て面識なき者ま

でも書を贈りて其の成功を祝し又は其の恙なきを賀しけるが中にも英米の書林は逸早く書を寄せて紀行の發行を望み敏捷なるは自らサンジバルに赴きて親しく之を請ひ時を移させ公けにしたり是れをデアイクエスト、ウォールド（最暗世界と名けたり蓋し前回の紀行を暗黒世界と名けたるに因めるものならん、其の原稿料としては實に十五萬弗の巨額を受け取りしとぞ聞ゆる）斯くて英國に歸るや上下之を歓迎すること恰も國賓を待つが如く倫敦府民は特にセントセリユス會堂に於て慰勞の宴會を設け蘇丹令を招待せり此の宴席には皇太子親臨して躬ら開會の旨意を演述せられぬ蘇丹令は其の待遇の優渥なるを謝し一場の演説ををしける其の中の一節に曰く

今回の探検中に於て奇異の想ひをなしたるもの多き中に最も驚愕したるの公果大林なりき此大林は巨樹喬木生茂り暗黒なること洞窟の内に入りたるが如し、其の長さの六百二十英里、其の幅は五百十七英里、其の面積は三十二萬方英里に及べり、此をエーケルに打算すれば二億二千四百萬エーケルを得べし、今一エーケルに生るる樹木を四十八本とすれば其の全數寔に百七億五千萬本餘に上る割合なり、云々

蘇丹令の嘗て想を懸けたる貴嬢あり出發の前に當りて結婚を望みけれども障はるごとありて果さざりけるが是に至て遂に件の貴嬢と結婚の式を挙げたり
其の後倫敦市民はギルドホールに於て蘇丹令に對し無上の榮譽たる倫敦府のフロードム特權と共に美麗なる黄金

の手函を贈れり當日會せる者二千人に及び館の内外は錐を立るの地をも餘さず蘇丹令の式場に入るや樂隊は英雄の來るを見よ

てふ曲を奏し府知事の起て

予が府民の名義を以てヘンリー、モルトン、蘇丹令君が深く暗黒なる亞非利加の内地に入りて惠民、俟救濟の偉勳を奏したるを祝するは太だ光榮とする所なり、我が府民が蘇丹令君の亞非利加大陸を採檢して學術の爲め開明の爲め無量の辛苦を嘗め無限の危険を冒したるを景仰したるや久し、今や我が府民は蘇丹令君に倫敦府のフリードムと共に一箇の小函を贈らんとす此のフリードムは皇帝、王侯、非凡の愛國家、無雙の偉業を成したる人に限り贈るものにして府民が捧げ得べきもの、中にて最上

の榮譽とする所たり、幸に餽納を請ふ、

と演べて恭しく蘇丹令に授くるや拍手喝采の聲は館の内外に動搖めき渉り暫しの耳も聳するばかりなり、是れ實に千八百九十年五月十三日(明治二十三年)の事にぞありける

蘇丹令終

明治廿三年十一月十二日印刷
明治廿三年十一月十五日出版

實價金四十錢

版權登錄

版權所有

纂譯者 藤田軌達

大阪府 二丁目十六番屋敷

發行者 石丸憲三

同 東區高麗橋詰町 四十八番屋敷

印刷者 喜田甚太郎

同 東區平野町四丁目 九十一番屋敷

發行所 備後屋書房

東京銀坐二丁目十四番地

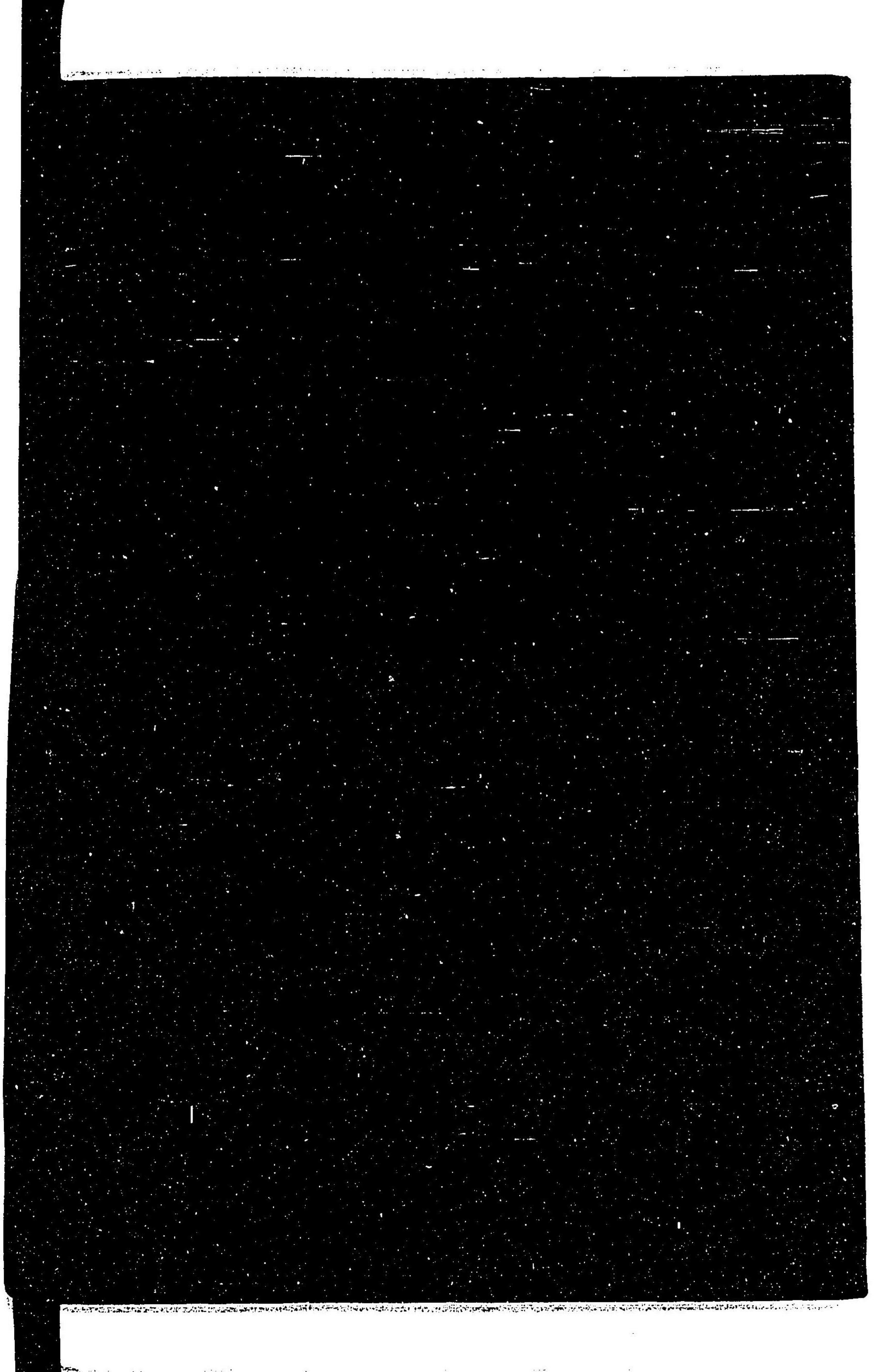
同 明文社

大阪高麗橋電信局前

141

17
48

5



17
48

Ⓜ

022023-000-7

17-48

蘇丹令

藤田 軌達 / 訳編

M23

ADA-0308



